

京都御苑セミの羽化観察

日 時 平成 30 年 6 月 21 日 (土)
場 所 京都御苑
天 候 晴れ 気温 33℃
参加者 45 名 (内子供 21 名) スタッフ 11 名 合計 56 名

今年のセミの羽化観察も例年通り初参加の方が多く来た。集合時間の午後 6 時は、まだ明るいので、まずセミに関する予備知識をもってもらうためのクイズを実施した。12 個のクイズも答えを子供たちはよく知っていて成績は上々だった。



子供はキノコが好きなので、下見の時に見つけたホコリタケで、胞子の飛ぶところを順に体験してもらった。



今日一番の指導員冥利につけることはといえば、孫にせがまれていやいや来たという女性だ。観察スタートするや否や、木にくっついていてセミの抜け殻を取って、「これは何というセミ」「オスカメスかどっち」「クマゼミはどこで見分けるの」「一回聞いただけでは覚えられない」「セミって奥深いわ」などメモを取りながら孫そっちのけで矢継ぎ早に質問されるのだが、質問攻めはうれしいものだ。

地上わずか 60 cm ほどの所での出来事。子供たち大勢が囲むようにしゃがんで熱心に観察、殻から体がほとんど抜けて頭を下にぶら下がっていたが、徐々に上体を起こし、最後のお尻の部分も抜け、殻にぶら下がろうとした瞬間、ぶら下がりに失敗して、地面に落ちてしまった。

「わっ！ どうしよう、どうなるの、助からないの」など。先ほどの女性も参加して、さ

ながら「セミ救済プロジェクト」が立ち上がり、みんな頑張り、頑張ると応援する声がセミに届けとばかりだ。他の場所で観察していた方たちも、情報を聞きつけて集まってきて、さらに大きな輪になった。子供たちの真剣な目がセミに集中し、心配そうな眼差しが印象的だ。



何とかセミを救いたいと、平らなところにおいて様子を見たが、やはりぶら下がることが大切なのかハネは少しずつ伸びてきて、ひょっとしてハネが正常に伸びてくれるかなと思ったが、左右のハネが少しいびつになってしまい、これではうまく飛べないにではないだろうか。

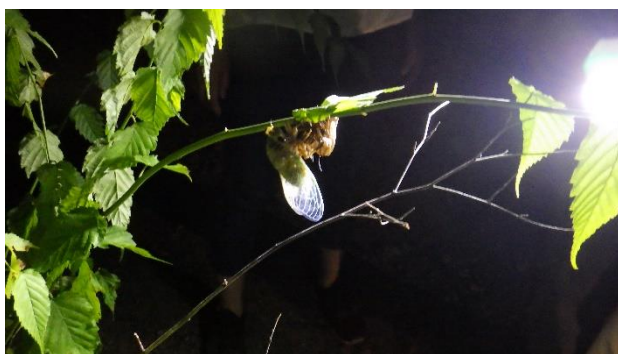
ここに集まって「セミ頑張る」と祈った気持ちはこれから先もずっと子供たちの心のどこかに永遠に残るだろう。

前出の女性の一言が素晴らしい。「地中で7年ほど過ごし、ようやく成虫になるために木に登り、ほぼ羽化が完了したかと思えたが、果たせなかったセミの無念を思うととても悲しく言葉がでない」と心からのコメントだった。

しかし、自然は容赦しない。失敗した個体を救う手段はないのだ。セミの受精卵には体の設計図と時刻表が内包されている（岡田節人著 からだの設計図より）が、失敗した場合の対処法までは内包されていないのだ。羽化に失敗したセミは残酷だがいずれ死に絶え、アリの餌となってしまう。

このような失敗をしたセミのDNAは後世に受け継がれることはないのかもしれない。

孫にせがまれ、いやいやついてきた女性は「まさに牛にひかれて善光寺参り」そのもの



だ。こんな感動を味わえて本当に良かったと言っていたのが、何よりの励みになる。

テレビや映画では味わうことのできない小動物の性への営みに向けた劇的な変化を、わずか6mm程度の虫によって、体感できるのである。

これからも一人でも多くの方に来ていただいて、自然の不思議や自然の大切さを肌で感じてもらうため、ずっとセミの羽化観察を続けいきたい。来年はどんな家族と出会えるのか今から楽しみだ。

文責（弓削俊彬）